

理念・政策勝負が民主党飛躍のカギ

産経新聞編集局次長
熊坂 隆光



■パフォーマンス政治がもたらす不幸

5年前の自民政権崩壊後、マスコミ、とりわけテレビが政局の動きを先導し、政治家がそれに乗るといったパターンが非常に特徴的だ。昨年の東京都議選直前のムツゴロウ騒ぎや住専問題の盛り込みがいい例だ。たしかにテレビは政治を茶の間に持ち込み、有権者の身近なものにしたという功の部分がある。しかしカメラのレンズを通して政治を翻弄し続けてきたという罪の部分も非常に大きい。その結果、政治家が国民の顔色を伺いつつ、いかにメディアに取り上げられるかに腐心するという政治が横行している。

メディアの力を最も強く認識しているのは菅直人氏ではないだろうか。菅氏は厚生大臣になってエイズ問題で一挙に有名になった。彼はこのときメディアの強みと権力の座に就くことの重要性を知ったのではないか。その結果、彼はさまざまな調査で必ず総理大臣候補のトップに擬せられる存在になってしまった。民主党の動き全体を見ると、まさに「いかにメディアに載るか」「いかに権力の座に就くか」が先行している印象が強い。しかし一方で、政治理念や政策が二の次になっている。こういう状況のなかで進められる新党が、果たして成功するのだろうか。

野党がこういう状況だから与党も全く締まらない。中選挙区制の下での選挙は、各党候補者がいわば“専門店”同士の争いでそれぞれが主張を言い合った。ところが51%の支持が必要な小選挙区制では、両候補は専門店同士の争いではなく“デパート”同士の争いをする。デパート同士では品質はさほど変わらない。むしろ見かけのサービスが判断材料になりがちだ。これでは決定的な対決などできない。その結果、票を貰うためのパフォーマンス政治が横行し、天下国家を論ずる場面がなくなっている。何より橋本首相はその典型だと言えよう。日露首脳会談でのパフォーマンスでわかるように、いかにテレビに取り上げられるかについては非常に熱心だ。大体国民に対して心の底から訴える、声涙ともに下るといった演説を橋本首相の口から聞いたことがない。与野党を含めこういう政治状況を持つ国民は、不幸という以外ない。

■民主党は参院選勝利が必須

二大政党制は政権交代が可能になるという謳い文句だったが、現在二大政党はおろか小党分裂の様相を呈している。政権交代の可能性は非常に少ない。民主党が本当に大きく飛躍するための条件は、選挙に勝ち続けることだ。少なく

とも次の参院選での勝利が絶対条件だ。では参院選に勝つためにはどうすべきか。私の個人的な考えだが、まず党首が政党ゴッコを脱し、政治理念・政策で勝負ができるかどうか重要だ。有権者は賢い。二匹目、三匹目のドジョウは通用しない。自民に失望し、野党にも期待できなければ無党派層が増加して投票率が下がる。世論調査を見てもいまのままでは自民は低投票率でも有利だ。

民主党は公認問題や比例順位が最大の問題になる。旧社会党の影響力が強い党内で、どこまで菅氏がガバナビリティーを発揮できるか、調整役に徹していただけるかが焦点となる。もう一つはどれだけきちんとした地方組織をつくることできるかだ。地方組織がなければ単なる風頼りの政党になる。地方議員の多数は政党の離合集散にウンザリしている。この地方の状況に対して民主党は必ずしも明確な指針を出さないし、まとめようと汗も流していない。

■野党の無力は日本の無力につながる

橋本政権は支持率が30%を割り、危険水域に入った。また永田町ではダブル選挙の影がちらつきだした。実は自民党内にダブル選挙待望論は多い。首相自身も解散権という伝家の宝刀で難局を乗り切る選択肢も当然考えているだろう。現実には自民党にとって賭けとなるから可能性は少ないが、橋本首相交代論が大きくなるのに併行して首相自身も解散・ダブル選挙のカードをちらつかせるだろう。

このまま参院選が行われた場合、自民党はかなりの議席を伸ばすだろう。民主党は全選挙区できちんと戦える候補者を揃え、なおかつ組織的な選挙ができるかがカギだ。政治家はもちろん選挙に勝たねばならない。しかし当選至上主義では、自民党だけが政権政党として安泰、それ以外の政党が離合集散を繰り返し、なかなか自民党の首根っ子を押しられないという構図で続いてしまいかねない。民主党として戦うとすれば、相当の覚悟を決めてやらなければ難しい。またその覚悟がなければ、選挙のたびに政党を変えろということが続くだろう。野党の無力はそのまま日本の政治の無力につながる。与野党ががっぷり四つで戦うという政治のダイナミズムが必要だ。

4月21日 月例研究会より (要旨)